

なぜ、中学教師は「忙しい」を口癖にしているのか？

小林 朗

一、疲れている中学教師

B子さんの朝は突然、目覚し時計のベルで始まる。時刻は午前六時半。重たい体を無理やりにはットから起こす。

気だるさと汗ばんだ体をシャワーのお湯で洗う。やっと、頭もはっきりしてくる。身支度を整え、アパートを後にする。時刻は午前七時二十分。朝御飯は食わず、化粧もしていない。

出勤途中の車内では、今日やらねばならないことがB子さんの脳裏をよぎる。

学校に着くと、朝八時から夕方六時まで自分の仕事はできない。授業・生徒指導・会議・部活と流れにのってこなす。B子さんはできるだけ、生徒の交流をかかさない。教室や廊下、教務室で生徒の声に耳を傾ける。

毎日、彼女は時間しかない授業のない時間が待ち遠しい。一杯のコーヒーがおいしい。

生徒がいなくなった午後六時以降は自分の仕事にあてる。明日の授業のための教材研究、学校で割りあてられた仕事、学年で実施する朝学習の問題作りと余念がない。

教務室は一人帰り、また一人帰り、B子さんだけが残る。午後九時、学校を出る。彼女のカバンには家に持って帰る仕事がつまっている。

アパートに帰って、二時間ぐらいいは何もできない。

脱力感と疲れでボケッーとBさんはしている。

午後十一時。持ってきた仕事をする。時計は午前一時をまわっている。歯を磨き、ベッドのふとんの中にもぐり込む。

B子さんの毎日の生活を追ってみた。

さて、二学期のある朝である。Bさんはいつもの時間に出勤したが、学校の入口に来ると車のアクセルを踏んでしまった。学校を通り過ぎて、アパートへ帰る。

学校へ一時間、休みをもらうためにBさんは電話をした。遅れて行くと周囲からは、朝寝坊と決めつけられたので弁明を彼女はしなかった。

どの中学教師もB子さんのように学校へ行きたくない朝を経験している。なぜ、Bさんは学校を通過したのか。毎日の彼女の疲れきった生活が関連していることは間違いない。

また、最近、B子さんのまわりの若い女性教師で「煙草」を吸う人が少なくない。疲れとストレスは彼女だけの問題でない。

B子さんのように疲れきっている教師は多い。その原因である中学校の「多忙」の現実を見てゆくことにする。

二、中学校の「多忙」の現実

(1) 研修の嵐

C男さんは、初任者研修の内容をほとんど忘れてしまった。只、同じ採用年度の人たちと邂逅し、情報交換する同級会というイメージであった。授業が遅れる、生徒との活動を途中で投げ出して行くといった研修である。

学校である学級経営や生徒指導、道徳などの研修会は、本音が出ず建て前のため大半、眠っている。本当に身につけたい力量や「子どもの見方」については、C男さんが学べない気がしてしまう。

最近、研修団体だといわれ、ある学園に無理やりに入会させられた。研修というよりは学校の延長で、飲み会が増えただけである。

C男さんは、自分の悩みに答えてくれる研修会がほしいと考えている。

S夫さんは十二年目の教師である。近頃、新潟市内の中学校にも押しつけの研修が増えたと思っている。文部省・県、市教育委員会の三つのレベルで指定校が

それぞれ決っていく。職員会議の話し合いで決定するのではなく、校長の一方的な押しつけが多い。特に、「いきいきスクール」や「学力向上」という研修が登場してから、このような傾向に拍車がかかった。

S夫さんは今年になって二回、驚いた。

例年、参加している県立教育センターの教科研修が夏休みに集中していることが第一の驚きであった。長い休みに、自分なりに勉強しようと考えていたのが計画変更を余儀無くされてしまった。

次に、今年から教育委員会が強制的に行った十二年目研修であった。挨拶の仕方が悪いと言って、何回もやり直しさせられた。研修自体が教師の力量を高めるものではなく、教師管理が強いと思った。

C男・S夫さんと共に、上から押しつけられる研修に嫌悪を感じている。県内の中学教師の研修実態だといえる。これらの上からの研修は中学教師のストレスの一つである。

(2) 部活動の幻影

W雄さんは部活動に生きがいをもっている。バレーボール部で休日の一日練習はあたり前である。もちろん、朝練習も一生懸命、励んでいる。強いチームがいれば県内は及ばず、県外でも練習試合に出かける。

子どもたちが、勉強だけでなく活動する場をつくり、

どれだけ非行防止になっているかW雄さんは自負している。

P T Aの人たちが懸念の声をあげていることを知らない。

W雄さんのように部活動に生きがいを持っている人は多い。しかし、授業や学校の仕事を犠牲にしているケースが目立つといえる。

管理職が、部活動の成果を学校の売名行為に使ったり、当事者が勲章にして出世していく場合もある。

それ以上に、この勝利主義は子どもへの重圧になっていることが問題である。

部活動をまじめに考え、子どもに即して活動している教師も少なくない。

部活動の過熱を学校のテーゼにして、すべての教師に要求すると、教師のストレスは最高点に達する。

(3) 「ぶっつけてこんな思いをするの？」

M美さんは教師になって三年。いつも教師は自分にあっているか考えている。真剣に転職も何回となく頭の中をよぎる。

M美さんがストレスがたまるのは、子どもたちのことである。授業で私語ばかりしている子を注意したり、学級で弱い者いじめをする子を指導したりする時、決まって、反抗的な眼を返される。M美さんは、いつも

こういう場合、悲しくなってくる。いくら教師でも、
どうしてこんな思いまでしなければならないのか疑問
になる。

また、M美さんの学級は不登校の生徒が一人いる。
毎日、この子のことは頭から離れない。

先日、けんかをした男の子たちの話を聞こうとした
が、放課後に会議が三日連続あったためにM美さんは
聞くことができなかった。

そんなM美さんを見かねて、同僚の教師が「先生、
ゆとりをもたないと子どもは見えてこないヨ」と言わ
れ、彼女はドキッとした。

そういえば、毎日の学校の仕事に追われ、学級の子
どもたち一人ひとりと話す時間もなかったと気付
いた。M美さんは、自分のことで精一杯で、子どもた
ちがどうして反抗したり、暗い眼をするのか考える余
裕もなかったことを反省した。

M美さんは最近、たくさん子どものことで厭になっ
ても、一つ嬉しいことがあるとすべてを忘れられるこ
とがわかった。

同僚の教師からも「成長したネ」と言われ、少しは
教師の仕事に自信が持てた。

M美さんのように、毎日の生徒指導に時間をとられ、
ストレスを増大させている中学教師は多い。生徒指導

については、中学校でもできるだけ悪いことは隠すと
いう面がある。万引・煙草・校舎破壊・いじめなど全
職員に伝えず、担当者だけで処理してしまう。そのた
め、全職員が協力的体制がでにくい。その中で、M美
さんのような若い教師は誰に相談してよいのかわから
ず悩む。

学校が閉鎖的な性格上、子どもも教師もお互いにま
わりが見えなくなる。周囲と手を結べない状況は両者
をストレスの渦に巻き込んでいく。

三、善意の一律主義

B子・M美・C男さんの三人が夜、学校に残って仕
事していると決まって、愚痴が始まる。ほとんどが、
学校で行う教育活動についてである。毎日、自分たち
が子どもに指導していることで、三人とも「納得」で
きないことが多いからである。教師が納得できないの
に子どもへやりなさいとは、明白に言えないので三人
は、困っている。

もちろん、職員会議で、それらについて反対する発
言をすればよいのだが、三人ともそこまでできないた
め、ストレスがたまる。せめて、愚痴を言いあって気
分転換している。

今夜の三人も、三題話で花が咲いている。

C男さんが、「月曜日の全校朝会で生徒たちが退場するのに私語をしないで行進していくのは異様な感じしない」と口火を切った。すかさず、M美さん、「私もずっと、そう思っていた」と続く。「私は、週の初めの月曜日で気にかかる生徒の近くに行って話しかけたいのに、場違いでできないので本当に困るワ」とB子さんも話に加わってくる。「学年朝会で他の学年が教室にいれば迷惑になるけど、全校だもの、退場する途中の教室、誰もいないのにネ……」とC男さん。B子さんが、「あれじゃ、まるで軍隊だワ。生徒たちだって、つまらない話を聞いて我慢しているんだから、ホッとしてまわりと会話したいヨネ」と話す。

三人は、仕事をやめ、教務室の後ろのソファーにかけて本格的に話し始めた。

「軍隊といえば私、納得しないことがあるのヨ。お昼の弁当（新潟市内の中学校は三校以外、給食ではない）、生徒が座席にすわって黒板の方を向いて一斉に食べさせるの止めてもらいたいワ」とM美さんが言う。「うちの学年もそうなんだヨ。弁当くらい、どんなスタイルでもよいと思うけど」とC男さんが口をはさむ。「私も困ったワ。生徒たちにはどうしてですかと突き上げられるし、自分でも納得していないから、説得できないでしょう。学年会で理由を聞いても、はっき

した声が返ってこないんだもの」とB子さんも困惑した顔。「その上、教師が教室へ行くまで食べないことにしようが始まったから、二度、驚いたヨ」とC男さん。「だって、食は大人も子どもも同等でしょう」とM美さんも高ぶって話す。「あなたの学級だけ歩調そろえないと、秩序が乱れると学年会でダメ押しされたワヨ」とM美は続ける。「そりゃ、生徒はそろっていないけりゃ、どうして、あの学級だけ言うワ。でも、土台、そんなこと学級の裁量でいいワ」とB子さん。「きっと、昼食も指導の一貫、生徒をきちんとさせようと思ってるんだらう」とC男さんが話すと、三人とも同時にため息をつく。

「こういうことで、学校が荒れないためにやっているのかしら？」とB子さんがフツと言う。「でも、一律にそろえても、生徒たちが納得していなかったら大変になるだらう」とC男さんが断言する。M美さん、「生徒の反乱ネ」と言う三人、顔を見合わせる。

B子さんが、「どうして教師は生徒を自分の枠の中に入れたがるのかしら。それでいて、全然、生徒たちの気持ち理解していないでしょう。私を含めて」としんみり語る。「だから、隅々まで生徒を知っておきたいと『毎日の生活ノート』のような記録をつけさせて提出させる。私は生徒のこと、知っていますという自

「己満足かな？」とC男さんが返す。「けれど、本当は何もわかっていないヨネ。だって、生徒が教師に提出することに本当のことや知られたくないこと書かないでしょう。形式で書いてきたものを時間をかけて点検する。仕事はふえるし、むなししいし、厭になっちゃうワ」とM美さんも不平を言う。「そうだヨネ。まず、生徒と本音で交流できることを考えるのが大切で、形式だけそろえていけば、生徒たちは教師に壁をつくっちゃうヨ」とC男さんが結論を言って、今夜の話は終わった。

三人とも、これらのことが教師の「善意」で行われていることを知っている。どの教師も生徒を健全に育てたいと願っているとわかってる。しかし、なぜ、教師の余計な仕事をふやし多忙化を進め、生徒と一緒にストレスが倍加していくのか三人の若い教師には原因がわからない。現在、生徒の実態だけでなく、若い教師集団の意識とも掛け離れている教師の「基準」を中学校では問う必要性がある。

四、「忙しい」を乗り越える

本文で、筆者は中学校の「多忙」の現実をできるだけリアルにするため、ルポルタージュ風にまとめた。特に、若い教師の眼を通して、中学校の忙しい現実と

それに葛藤して、ストレスを深めていく様子を書いた。しかし、「管理職と学閥」について記述しなければ、中学校の「多忙」の現実がわかりにくいいため、若干、明らかにしたい。

最近、管理職の中に、「朕は国家なり」という錯覚を起こし、学校を私物化する人が少なくない。やたらに、研究会を持ってきたり、校内での仕事を増加させる。思いつきで校長が仕事をつくるのである。校長の顔をうかがって、教師はストレスを増大させる。

加えて、これらの校長を抑制するのではなく、出世街道を歩いている学閥に所属する主任クラスの教師が、それに加担して校内の多忙を促進するのである。

中学校の「多忙」を論じる場合、教師の中でも大分、その程度に違いがあることを明記したい。学級担任や授業の多い教師が目まぐるしく忙しいのかかわらず、授業数が少なく、いつも教務室にいる主任クラスの教師の存在は無視できない。この人たちは、まわりをカバーするために授業が少ないのではなく、教頭試験のために時間が確保されているのである。もちろん、健全の主任もいるが、大半は中間管理職の顔を決めている。

教師間に、多忙では二極分解の現実がある。

さて、先程の若い教師たちが生き生きするためには

どうしたら、よいのだろうか？

確かに、今迄、筆者が述べてきたように中学校はまわりの同僚と話せないくらい忙しい。

しかし、それ以上に教師が納得せず、押しつけられる仕事が多く、自己決定できない所に多忙化の問題のネックがあるといえる。

中学教師の民主主義のレベルが、中学の多忙化の本質を握る切り口である。

今できることは、教師一人ひとりが自分の意志で判断できる教育場面を多くすることであり、職場で自分なりに「声」を出すことが多忙化を和らげる近道だと筆者は考えている。

(付記) 本文で登場しているB子・M美・C男・S夫・W雄さんは架空の人物である。

(こばやし あきら) 新潟市藤見中学校)



「新学力観」の訳語

ある必要があって、県の教育庁に電話して聞いた。「新学力観という言葉を文部省は、英語にどう訳しているか、教えて頂きたい」「どちらさまですか」

「にいがた県民教育研究所という会員制の研究所の所員、〇〇といえます」

「私どものところには未だありませんね。文部省にきくのが早道ですよ」

こうして文部省に電話した。受付けの女性は、趣旨を聴くと初等中等教育局小学校課につないだ。やがて、若い男性の声になった。「それは、新しい学習指導要領が目指す学力の考え方のことで、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる……」

えんえんと解説し始めた。適当のところできえぎって、訳語が知りたいと求めた。

しばらく周りに聞いている様子の後、「公的の訳語はないと思います。何しろ平成元年に改訂された学習指導要領の英語訳さえ未だ無いのですよ……」

信じがたいことだった。

(Y)